

マアジ資源新規加入量調査

(資源評価調査)

為石起司・村山達朗

1. 研究目的

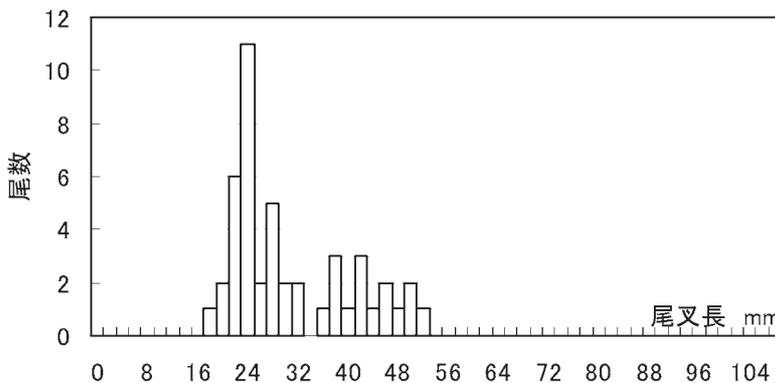
本県のまき網漁業や定置網漁業の主要な漁獲対象種であるマアジの加入量を推定するため、中層トロール網によるマアジ幼稚魚の採捕、計量魚群探知機によるマアジ幼稚魚の分布量調査を実施し、日本海西南海域へのマアジ新規加入量の資源評価を行う。

2. 研究方法

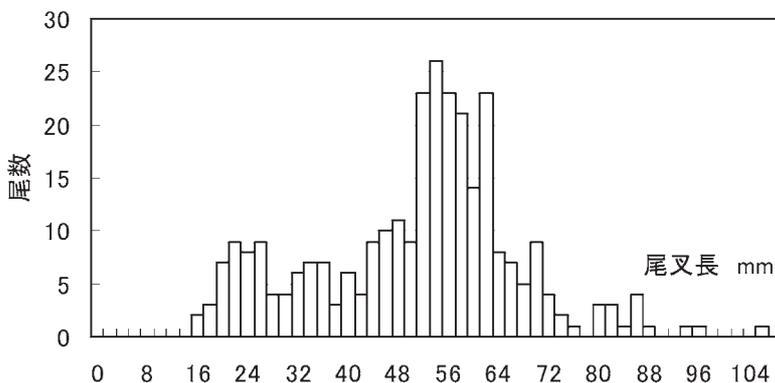
山口県沖から島根県沖に設定された観測線上を船速 10 ノットで航行し、計量魚探により魚群反応 (SV 値) を 1 海里毎に計測する。また、各線上で定められた定点で中層トロール調査を実施するほか、観測線上で顕著な反応が見られた時は適宜中層トロール調査を行う。中層トロールの曳網水深は 30 ~ 50 m とし、曳網速度は 3 ノット、曳網時間は 30 分間とする。採集されたマアジは 100 個体をランダム抽出し、尾叉長を 1 mm 単位で測定し、100 個体以上は全体量を把握する。

3. 研究結果

6/7~9 中層トロールによるマアジの尾叉長組成 10操業分 島根県前期



6/23~29 中層トロールによるマアジの尾叉長組成 12操業分 島根県後期



調査は前期 (6月7日~9日) と後期 (6月23日~29日) の2回行った。各調査で採集されたマアジの体長組成を図に示した。本年度は、新たに導入した“日水研型サンプルギア”を用いて調査を実施したが、昨年度に比較して採集個体数が極めて少なく、調査結果と秋以降のマアジ当歳魚漁獲動向との相関も低かった。この要因としては、“日水研型サンプルギア”の漁獲効率が低い、近年マアジ加入時期が長期化している等が考えられた。今後は、採集漁具の漁獲効率の推定と、得られたデータとその後の資源加入との関係について重点的に解析する必要がある。

4. 研究成果

研究結果から推定されたABCをもとに、マアジのTAC (漁獲可能量) が設定された。